

## ◇ 日本人の心情

# 和歌と盆栽の魅力



日本盆栽作家協会代表幹事

山田登美男

日本文化を表現したひじょうに短い形として、盆栽と和歌・俳句というものがあります。

春は花 夏はほととぎす 秋は月  
冬雪さえて すすしかりけり

道元禅師（1200～1253）は、鎌倉時代初期の人で、中国から日本に初めて禅宗を伝え、日本の禅を確立した人です。この和歌は禅師のもので、当たり前の自然の風景を歌っている。

つまり、春は花が咲き、夏は木陰で鳥が鳴く、秋は月がひじょうに美しい、冬は雪が冷たく清らかである。この誰にでもわかる当たり前のことを当たり前として受け取るということ。そこに自然と人間が一体になった世界があるということです。つまり雪月花の世界に通じます。

同じように、感動の極地、至高の体験を詠んだ俳句で江戸時代の日本

の最も偉大な俳人である松尾芭蕉が、松島という美しい小島を詠んだ俳句です。

松島や ああ松島や 松島や

自然と一致した最高の境地は、ここにあると評価しています。

又、道元の和歌の影響下に作られているといわれます良寛の和歌に（再晩年）

形見とて 何か残さん 春は花  
山ほととぎす 秋はもみじ葉

自分が死んだ後も、自然はそのまま四季を繰り返している。その自然の中に自分の生涯も抱かれている。そのような絶対的な真理として、自然をとらえる。それを残る人々が私から学んでほしいといっている。

又、有名な歌に



竹の盆栽の床飾り

子どもらと 毛毬つきつつ この里に  
遊ぶ春日に 暮れずともよし

められて尊いのです。

### 盆栽のある空間・床の間について

### 日本の美的姿勢と「遊び」について

それは物質的な貧しさの中にこそ  
真の心の豊かさを味わえる。

人間の力で作り出したものよりも、  
自然そのものの力が感じられる  
ものを大切にすることである。

「遊び」には二面性がある。(行動  
をする意味と行動を起こさない意  
味)。

なぜこうした二面性が生まれるの  
だろうか。例えば「わび・さび」と  
いうと非常に静かだが、実際には狂  
気に至るような激しさがある。

わび茶の奥義を象徴している「枯  
れかじけて寒かれ」という言葉にし  
ても本当に真冬の枯れ枝のようなも  
のの中に、激しい生命を宿している。  
盆栽人であれば、時々感じること  
である。

そんな自分が盆栽を見ていると同  
時に、盆栽が自分を見ている。つま  
り自然が一体化して宇宙が一つのも  
のと感じられる。言い換えれば、盆  
栽と対話していることとなります。  
例えば、床の間に花ものを飾る時、  
一輪もしくは二、三輪のときに、そ  
れも未だ咲ききらない蕾の状態を飾  
ることによって、無限の可能性が秘